

1 実施計画および実施報告

月	研 究 ・ 研 修 内 容 等	
	実 施 計 画	実 施 報 告
4	・研究推進体制の確立 ・各種研修（校内）	・本年度の校内研究についての提案 ・ESD 講習会（講師：伊藤正志）
5	・具体的な取組の方法	・各学年で ESD カレンダー、指導計画等をもとに本年度の具体的な取組を確認
6	・現職教育研究協議会 ・授業研究の実施と反省	・総合的な学習での発表（簗） ・ESD 道徳研究授業（4・3 簗）
7	・授業研究の実施と反省 ・各種研修（校内） ・各種研修（校内） ・取組紹介	・ESD 総合研究授業（4・3 簗） 愛知教育大学教授 鈴木健二先生の指導 ・タブレット活用講習会 【講師：内田洋行（株）】 ・情報モラル講習会（講師：松田真利子） ・愛知県教育振興会「現職教育資料」に甚目寺小の取組 紹介 「地域に根ざした創意工夫ある ESD 活動と道徳・教育の連携」
8	・具体的な取組の見直し	・各学年で本年度の取組の見直しと ESD カレンダー、指導計画等の訂正
10	・現職教育研究集会 ・県教育研究集会 ・取組発表（あま市美和公民館）	・総合的な学習での発表（簗） ・総合的な学習での発表（簗） ・あま教師塾…「ESD に取り組むなら今でしょ！」（前野前校長）
11	・学校訪問 ・授業研究の実施と反省 ・本校視察	・ESD 道徳・国語の研究授業（5・2 宮崎、1・3 溝口） ・ESD 道徳研究授業（2・3 花井） ・中部大学国際ESDセンター客員教授視察 岐阜県養老町立広幡小学校校長視察
12	・授業研究の実施と反省 ・授業研究の実施と反省 ・各種研修（校内） ・研究論文	・算数科研究授業（6・2 村瀬） ・ESD 総合研究授業（3・3 山下） ・クリティカルシンキング勉強会 名城大学教職センター准教授 平山勉先生 ・研究論文海部地区入選（簗）
1	・取組発表（名城大学 MSAT） ・取組紹介 ・授業研究の実施と反省	・MSAT 授業実践交流フォーラム…甚目寺小の取組プレゼン（伊藤・簗） ・教育方法学テキスト『アクティブ・ラーニングへの布石』に甚目寺小の取組掲載 ・算数科研究授業（5・2 宮崎）
2	・授業研究の実施と反省 ・取組発表（東京） ・校内研究のまとめ ・本年度のまとめと次年度に向けて	・算数科研究授業（2・2 横田） ・ESD パワーアップ交流会…甚目寺小の取組プレゼン（簗） ・各学年が校内研究のまとめの原稿を提出 ・校内研究の成果と課題、次年度の校内研究に向けての検討会
3	・校内研究のまとめ	・研究冊子の完成と職員への配布

2 ESDの研究・取組について

（1）はじめに

将来の見通しがつきにくい現代において、子どもたちに必要な力は、次代に向けて様々な問題を、多くの人と話し合い、すり合わせながら解決していく意欲や能力・態度だと考える。（すりあわせるとは、情報を仕分けし、課題を明確にし、解決の糸口を探ることを総称するという）これらの力は、身近な問題を解決していく実体験の積み重ねによって、身に付けるべきものである。本校は、国立教育政策研究所が提唱する6つの概念（多様性・相互性・有限性・公平性・連携性・責任性）と7つの能力・態度（批判・未来・多面・伝達・協力・関連・参加）を基本的視点として、人権教育を柱とし、総合学習「ふるさと甚目寺」（生活科・総合的な学習の時間）と道徳を行動面と情意面の両輪とし、教科・領域・学年間の連携を図って、持続可能な取組にする努力を続けている。

本校の周りには、飛鳥時代に創建された甚目寺観音をはじめとする歴史的・文化的・伝統的な遺産が数多く存在する。また、甚目寺観音を中心として広がった商店街がある一方、自動車産業を中心とした工場も点在する。この地域を自分のふるさととして大切に思い、広く、未来へつなげていくために、自分たちがこの地域で大切にしたいものに目を向け、人や地域に関わり、人から人へ伝え、人や地域とつながる「かかわる・つたえる・つながる」学習や活動を重視した取組が本校のE S Dの特徴である。

（２）研究・取組の経過

本校は創立 143 年の歴史をもつ学校であり、古くから地域との結び付きがある。生活科・総合的な学習の時間で地域について調べたこと、体験したことを発表してきた。しかし、それは生活科・総合的な学習の時間だけのものとして、発表会に向けての取組という単発的な学習や活動になっていたところがあった。今までの取組の改善に向け、平成 22 年度にE S Dの導入準備を始めた。平成 23 年度からE S Dの考え方、視点を取り入れ、「人と人とのつながり、人と地域とのつながりを大切にするE S Dの取組」をテーマとして、生活科・総合的な学習の時間をまとめ、総合学習「ふるさと甚目寺」とし、これまでの取組を見直し、整理を始めた。まず、E S Dカレンダー・年間指導計画を作成し、毎年度見直しを行っていくことにした。また、ユネスコスクール加盟に向けて申請書類の準備を始めた。

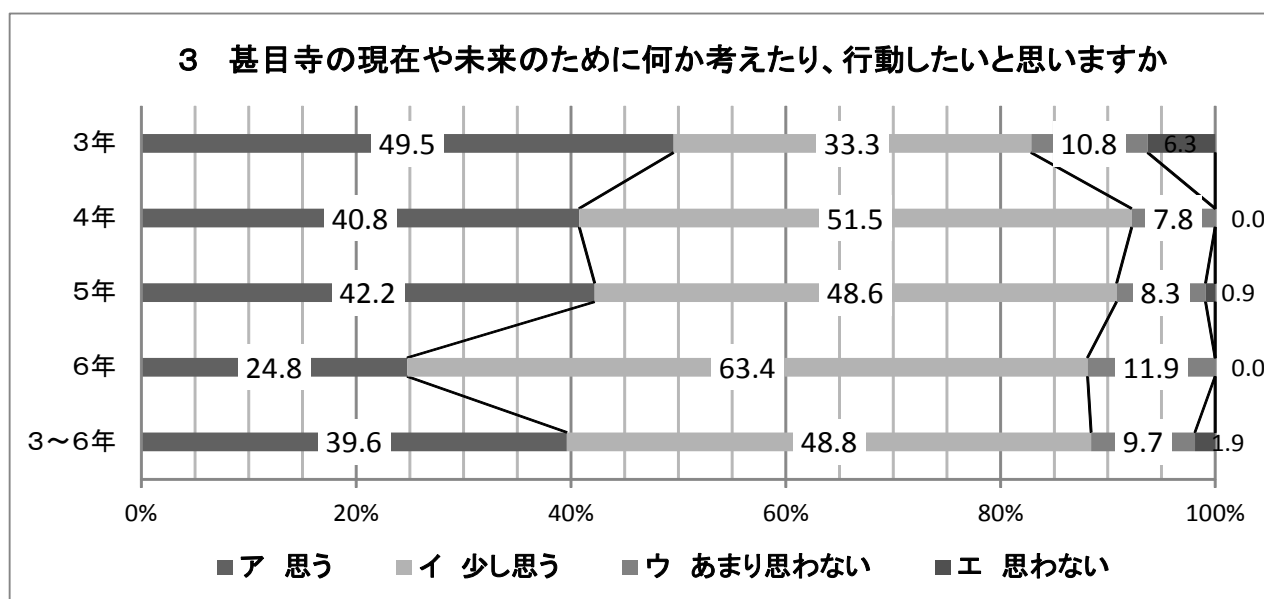
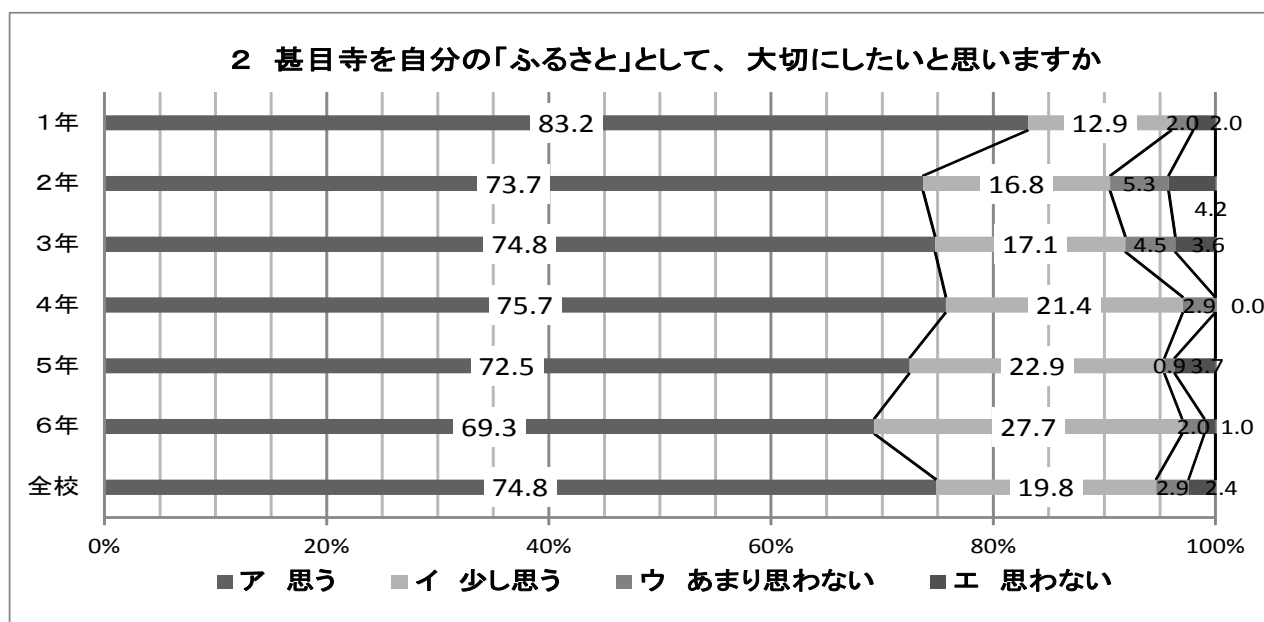
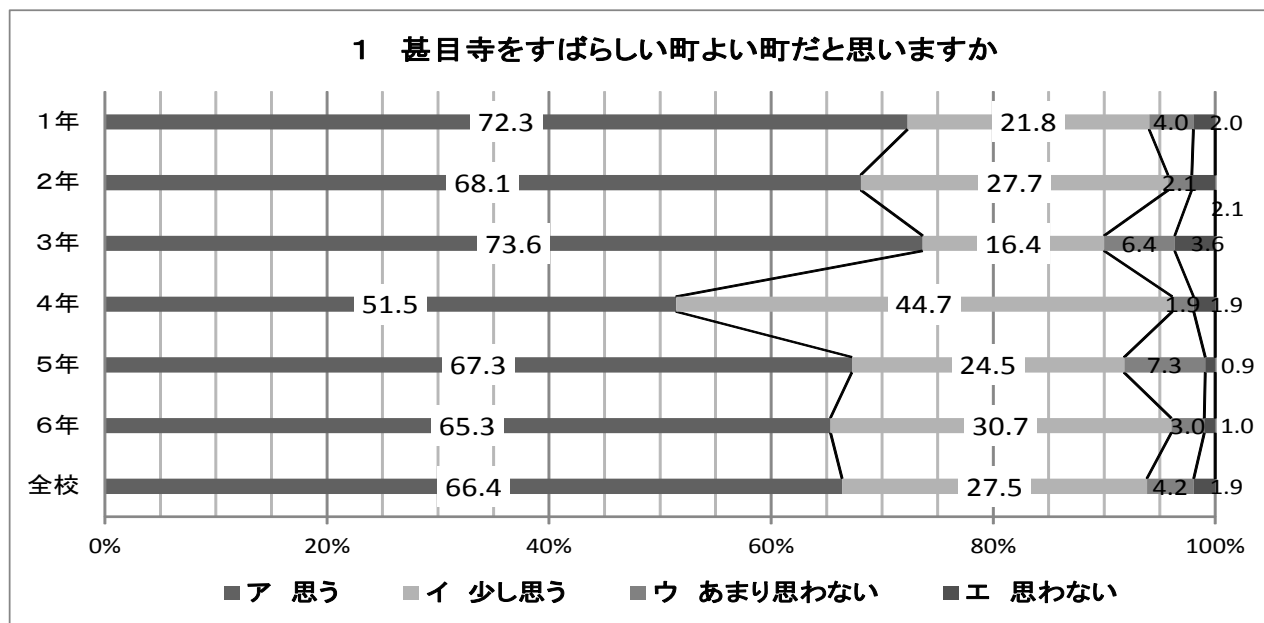
平成 24 年度は、国立教育政策研究所の「学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究〔最終報告書〕」に基づいて、総合学習「ふるさと甚目寺」の学習や活動に、「持続可能な社会づくりの構成概念」と「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を取り入れ、教材を内容的・空間的・時間的につなげること、人や地域をつなげること、身に付けた能力・態度を行動につなげることを大切にした学習指導をさらに進めた。そして、12 月にはユネスコスクールへの加盟を承認され、学校全体でE S Dに取り組む体制が整った。

平成 25 年度は、言語活動の充実について、各教科での取組を見直しながら、総合学習でも児童の主体的な学習と行動力を育てるために、コミュニケーション能力の向上を図ることとした。研究テーマ「話し合いを深め、互いに学び合う児童、よりよい方向に行動できる児童の育成」に基づいて、話し合いの活動を充実させる手段として、「K J 法」を取り入れ、各学年に応じたE S Dの授業づくりに取り組んだ。

平成 26 年度は、E S D活動と道徳との連携を強化した。それにより情意面を道徳が、行動面を生活科や総合的な学習の時間が担う形で、車の両輪として学習を進めた。そうした連携強化を通して、キーワードとなるのが、活動テーマに関わる「人の思い」であることが分かってきた。地域の人材や教材に目を向けた時、地域に関わる人の思いに注目することで学習活動が深まり、ひいては地域のために何かをしたいという思いにまでつながっていくことが確認された。さらに、話し合いにおいてシンキングツールを用いたことにより、視覚的に見やすく分類するという役割だけでなく、その分類した結果をみて新しい課題を見つけることができ、次の活動につながった。

そこで本年度は、「人の思い」に注目しつつ、さらなる話し合い活動の充実を目指し、話し合い活動の方法を再度検討することにした。これまでの実践では、KJ 法を含めたシンキングツールの特性を活かし、たくさんの意見を出し合い、それらの意見を基に活動中のキーワードを見つけてきたが、出された意見をさらに深く分析することはなく、同様によい意見があったとしても、その意見を全体に発信したり、評価し合ったりして発展させることはあまりなかった。出された意見をもう一度別の視点から見つめたり、他の児童の意見を知る機会を得られたりすることができれば、児童一人ひとりの思いや考えを今まで以上におさえながら課題解決を進めていくことができるのではないか。そこで、「児童が話し合い活動の中で、別の視点から問題について考えたり、他の児童の意見を聞いたりして、新しい見方や考え方を発見し合う場面」を、「高め合い」として設定して授業研究をすすめた。

(3) ESD事後アンケートの結果



（４）研究の成果と課題

本年度のテーマ「思いや考えを交流し、互いに高め合う児童の育成 ―総合学習と道徳の連携を通して道徳的実践力を高める―」に基づいて、「児童が話し合い活動の中で、別の視点から問題について考えたり、他の児童の意見を聞いたりして、新しい見方や考え方を発見し合う場面」を、「高め合い」として設定して授業研究をすすめた。また、E S Dカレンダーを見直し、道徳とE S Dの活動の連携に務め、話し合い活動を充実させる手段として、引き続きシンキングツールの活用を図り、各学年に応じたE S Dに取り組み、道徳的実践力向上に励んだ。

ア 「高め合い」の授業研究について

- ・ 一つのテーマに対して、別の視点を与えることで違った見方や考えを持つことができることを確認した。（２年道徳「いただきます」、４年道徳「漂流ゴミのゆくえ」）
- ・ 「二項対立」によりプラスとマイナスの気持ちから、「働く人を支えていた思い」に迫っていった。（５年道徳「モノづくりと人」）
- ・ Yチャートにまとめられた意見をクラス全員の子と吟味することで、今後のE S Dの取組を決めていった。（３年総合『人にやさしい町づくり』のために自分たちにできることをしよう）

こうした授業研究を通して、自分たちのE S D活動に自信をもち進んで関わる児童、人の気持ちや思いに気付き、地域の将来のためによりよく行動できる児童の育成につながる効果的な授業になることを実感した。

イ 本年度強調したい成果について

- ・ E S Dカレンダーの見直しについては、どの学年も毎年行っている。本年度は特に４年生において大きな見直しを行い、より身近な環境を教材にして取り組んだ。
- ・ 昨年に引き続き道徳資料が充実した。特に５年生においては、自動車部品を作る「佐藤工業」が、鉄板に微細な穴を開ける技術では世界のトップ２社の１社に入る技術に到達するまでの苦労を、読み物資料として分かりやすく書き上げ、次年度以降にも使える物とした。
- ・ シンキングツールの活用ノウハウが出来つつある。一番の欠点である全体交流については、実物投影機の活用、情報を厳選し発表していく、黒板上でクラス全体の仕分けを行っていくなどさまざまな工夫が見られた。
- ・ シンキングツールを使い、高め合いの授業をすると４５分では時間が足りなくなったため、６０分や９０分での授業研究を行うことを共通理解した。

ウ 自己肯定感を高める学級活動の取組

今までは４年生以上が取り組んでいたが、今年度から全校体制とした。そして１年生から３年生についてもE S Dカレンダーに位置づけて取り組んだ。

エ E S Dの学校評価のためのアンケート結果

全体の傾向は、昨年の傾向と変わらない。また、数値的にも調査開始当初の４年前に比べて、改善傾向は持続している。例えば低いとされている３の質問については、調査当初は「思う」の全校平均は28.9%だった。本年度は39.6%である。

今回本年度の特徴として注目したいのは、４年生である。４年生はE S Dカレンダーの見直しを行い、甚目寺の自然や生活環境に今まで以上に正対したことで、まだまだ甚目寺が素晴らしい町、よい町ではないと判断した児童が多かった。一方、大切にしたい気持ちや何か考えたり、行動したい気持ちは高く、このギャップが将来の甚目寺の環境をよくする原動力となっていくのではないかと考える。

オ 課題とおわりに

「高め合い」については、今年は手探りの状態であり、児童の姿に即した「定義づけ」が不十分であったことは否めない。今後は理論的裏付けを基に、さらなる実践の積み上げを行うことが必要である。道徳との連携は着実に進んでいる。引き続き道徳の自作教材開発を進めていきたい。シンキングツールについては、よい実践が行われている。ただ普段から気軽に使っているとまでは言えない。さらなる活用のための場づくりを考えていかなければならない。自己肯定感を高める取組については、低学年で始まったばかりである。授業研究として来年度以降の取組を検証していかなければならない。

E S Dの取組は、今年で６年となった。将来のICT環境にもよるが、今後さらなる進化をとげていくためには、タブレット端末の導入とそれに関わる研究も視野に入りたい。今後も良いものは残し、切るものは切って、息の長い研究を続けていきたい。